

02・昼休みの円形教室で、自分からばんつ脱いでささやきクリいじりでイかせてもらう

トラック01からそのまま続き。

※トラック01から自然に続いて聞ける印象にするため、トラック間の時間は通常より短くする。

とある年の春。

五月十二日。十二時半ごろ。

場所は主人公とシーラが通っている学園の、とある講義室の入り口。

天気は晴れ。気温は二十二度程度。

主人公とシーラ、あまねと日菜子と一旦別れ、講義室に入る所である。

SE1 昼休みの廊下の喧騒

【最初から最後まで流す】

【トラック01のSE4と同じ音。開始位置を変えて流す】

【非常に音量を小さくして流す。ほとんど聞こえない程度】

【0—2秒ほど流してSE2】

【その後、SE4で扉が閉まるとともにフェードアウトして完全に聞こえなくなる】

SE2 シーラが講義室の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

シーラ、講義室の扉を開ける。

まずは主人公が講義室に入り、シーラが続く形になる。

SE3 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—2秒ほど流してSE4】

【▲1で一度ストップする】

【▲2で再開する】

【▲2から7秒ほど流してストップする】

【▲2から、『広い講義室』を表現するために、少しエコーがかかる】

SE 4 シーラの足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0—2秒ほど流してSE5】

【▲1 で一度ストップする】

【▲2 で再開する】

【▲2 から7秒ほど流してストップする】

【▲2 から、『広い講義室』を表現するために、少しエコーがかかる】

▲1 ここで一度SE3とSE4がストップする。

SE 5 シーラが講義室の扉を閉める音

【最初から最後まで流す】

主人公とシーラ、無人の講義室に入って行く。

目指すは、いつも座っているお気に入りの席だ。

講義室はとても広い。

大学によくある円形教室のイメージ。
椅子は独立しているタイプ。

▲ 2 ここでS E 3とS E 4が再開する。7秒分ほど流してストップする。

主人公、シーラに椅子を引いてもらう形で着席する。

S E 5 シーラが椅子を引く音

【最初から最後まで流す】

S E 6 主人公とシーラが椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

主人公、席につくと、『ふう』と少々わざとらしいため息をつく。
わざとらしいというか、わざとなので仕方がない。

二人きりになった事で、否応なしにシーラの事を意識してしまうのだ。
だが、これはおそらく自分だけなのだろう。
そう思うと、なんだか癪にさわる。

だから……主人公は素直に『キスして』とお願いできず、物欲しげにシーラを見上げてみては、あからさまに目をそらし。

かと思えばまたちらちらと、期待を隠しきれないそぶりをしてしまう。

シーラは教室の座席配置と同様、主人公の左隣に座っている。

〈主人公〉

「……ふう。やーっとお昼だね」

主人公、どぎまぎしながら、ごく自然な態度を装って話しかける。
露骨に不自然だ。

● 左 30センチ

「【穏やかに優しく。

疲れ気味の主人公をいたわる。

主人公の様子がなんだかおかしく、発情しているような人には気づいている。
だが、完全に知らないふりをしている」

ふふ。お疲れですね。

お二人が戻るまで、少しお眠りになられますか？」

〈主人公〉

「……うん、大丈夫。さっきすごい寝たし。

シーラの美味しいダイエツト弁当をいただかないとねー……」

主人公、そうは言いつつも、まるで落ち着きがない。

そわそわと己の膝をさすっては、お弁当があるとは思えない位置と方向に身体を向けている。

シーラはそれを、穏やかに見つめている。

● 左 30センチ

「小さく微笑んで。

主人公の一挙一動が可愛らしいので。

また『お弁当を食べる』と言いながら、主人公がどこかそわそわした様子なので。その理由は、すでにおおむね察している」

然様（さよう）でございますか？

では、お食事のご準備を」

〈主人公〉

「あー、ちよ。ちよつ、と待って」

● 左 30センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。
少し不思議そうに。

主人公の態度が妙なので」

……？

【小さく微笑んで。

不思議がりつつも承知する。

『お弁当もまだよいのですか？』という意味で言っている。
主人公の意図は、すでにおおむね理解している。

だが、その点に関してはまだつつこまない」
それもよろしいのですか？」

〈主人公〉

「うん。やっぱり。

やっぱり二人が来てから、もらおうかな！」

主人公、これでは何がしたいのかまるでわからない。

むろん、シーラのお弁当は食べたいと思っている。

お腹はすいているし、シーラはああは言っても、うまい事工夫して主人公の好物を詰めてくれているはずだ。

だから素直に先ほどの手提げに手を伸ばして、お弁当箱を取り出して食べればいい。だけど……。

〈主人公〉

「それより……。さっきからさあ。

授業中からさあ。

シーラ、なんつかニヤニヤしてない？」

それができずに、主人公は脈絡もなくシーラにいちやもんをつけ始める。

授業中から、シーラが妙に含みのある態度を取っている事について、絡み始める。

主人公、シーラと会話するために、顔をシーラの方へ向ける。

お互いの顔が向き合った事で、声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 30センチ

「【にこやかに優しく。

全く動じていない。

『そんなまさか』と、しらばっくれる感じで」

え？

【少し間が空く。

にこやかに優しく。

『全く心当たりがない』としらばっくれる感じで」

いえ。とんでもない。決してそのような事は」

〈主人公〉

「いーや、笑ってるね」

だが、これはあながち外れではなかったらしい。

言いながらシーラの顔は少しずつ緩んでいき、次第に笑いをこらえられなくなってきた様子だ。

シーラは普段ポーカーフェイスのクール系穏やかメイドで通っているが、実際はそうでもない。

感情を抑えるのがうまいだけで、喜怒哀楽は普通にあるのだ。
今だって……内心主人公の事が愉快でしようがないに決まっている。

●正面 30センチ

「【にこやかに優しく。

少しずつ声に笑みが混じり始める。

引き続き『そんなまさか』と、しらばっくれている】
そんな。笑ってなんて……」

〈主人公〉

「笑ってるでしょお！」

●正面 30センチ

「【穏やかに小さく笑い始める。

あくまで小さく、上品に笑っている感じで。

しかしこれは、シーラとしては『大爆笑』の部類に入る」

ふふっ。ふふふふっ……」

こうして、シーラは破顔した。

肩を小さく震わせて笑い始め、とうとうこのような事を言い出す。

● 正面 30センチ

「『※マーク』まで、笑いをこらえつつも、こらえきれない感じで。穏やかに小さく笑いながら話す。

しかし、あくまで小さく、上品に笑っている感じで。

先ほどの授業での主人公の事を思い出して『思い出し笑い』している」

……だって、お嬢様ったら……。

授業中、あれ程ぐっすりお休みになっていたのに。

急に起き上がられたかと思ったたら。

【特に笑いをこらえきれない感じで。

思い出せば思い出すほど面白いので】

……あんな事をおっしゃるんですもの……」※

〈主人公〉

「……もおー！ やっぱり笑ってた！
ムカつくやつだなあ！」

だが、主人公はまんざらでもない。

つまるところ、シーラが己に関心を示してくれるのなら、何でも嬉しいのだ。
それは間違いなく、シーラにも伝わっているだろう。

シーラは主人公の事など、すべてお見通しで。
だからこそ、こんな生意気な態度を取るのだ。

● 正面 30センチ

「穏やかに小さく笑いながら話す。

あくまで小さく、上品に笑っている感じで。

しかしこれは、シーラとしては『大爆笑』の部類に入る」

ふふ。ふふふふっ ♡

ええ、申し訳ありません……。

笑ってしまいました。

お嬢様が、あまりにも可愛らしいものですから、つい……。」

〈主人公〉

「ふーん。そお。可愛いとは思ってるんだ？」

そのうえ、この訊き方がもうダメだ。

これでは『可愛い』と言わせようとしているのがバレバレではないか。

●正面 30センチ

「【穏やかに小さく笑いつつ、次第に通常の話し方に戻る】
ええ。」

……そうです。

【通常の話し方に戻る】
お嬢様が魅力的だから。
つい、授業中も」

だが、シーラはしれっとこれにのり、こんな事を言う。

それから、また主人公の左耳元に唇を寄せ、先ほどと同じようにささやいてきた。

これによって、声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。」

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。トラック01での行動を再現するような感じで」

このように、ちよっかいをかけてしまったのです」※

〈主人公〉

「……あっ♡」

それは、単に耳元でひそひそ話されただけだ。

だが、主人公はそれだけでびくんと、敏感すぎるほどにあからさまに反応する。そうだ。

わかってはいるのだ。

なのに、わかっていて主人公はこうなる。

シーラはこんな風に身もだえする主人公を見るのがとにかく好きで。こんな、いかにもしとやかで従順なメイドのふりをしておきながら。

隙あらば、こうして悪戯してくるのだ。

シーラ、引き続きささやく。

★左 ささやく 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。

少しでもしエクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで」

ふふ。

お嬢様。

ここは学校ですから。そのような声を出してはなりませんよ」

〈主人公〉

「……だって……シーラが……っ ♡」

シーラ、今度は囁かずに、耳元で話す。

● 左 0センチ

「しつとりと優しく。」


『私が何かしましたでしょうか』という感じでしらばっくれる。

優しく微笑みながら、主人公の反応を楽しんでいる」

うん？

どうか致しましたか？」

〈主人公〉

「変な事するからあつ……」

こうなれば、もうシーラのペースだ。

主人公は媚びた甘ったるい声で反論するが、時すでに遅い。

後は、シーラに好きにされるのを待つのみとなる。

● 左 0センチ

「そつと、優しく。」

指摘を受けても、まるで気に留めない様子で。

それが当然のように続ける」

然様（さよう）でございましたか。

そうですね。先ほどから、私（わたくし）がこうして」

〈主人公〉

「……！」

言うど、シーラはさらに近づく。

そして、いよいよ主人公に本格的に触れてきた。

SE7 シーラが主人公の身体に触る音

【最初から最後まで流す】

シーラの手が、スカート越しに主人公の太ももを撫でてくる。

● 左 0センチ

「「そつと、優しく。」

今の行動を言葉で補足する」

触れたり……」

〈主人公〉

「……………あ……………！」

● 左 0センチ

「【※】ごく軽く耳を吹く※

ふいうちで、ドキツとさせるイメージで」
ふっ。

【そっと、優しく。

今の行動を言葉で補足する」
驚かせたり」

〈主人公〉

「……………あぁっ……………
♥……………」

こうなれば、もう終わりだ。

主人公はなすすべもなく高く喘ぐと、必死になって両手で己の口をふさぐ。
幸いにもこの声は外に漏れておらず、誰かが近づいてくる気配もない。

だが、ここは昼休みの学校だ。

いつ、どのようなタイミングで、誰が訪れてもおかしくない。

そもそも、もう少しすれば、あまねと日菜子が戻ってくるのだ。

それなのに……シーラは、平気でこんな事をしてくる。

● 左 0センチ

「※1回※ 耳にキスする。」

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

【そっと、優しく。

今の行動を言葉で補足する】

口づけたら。

【※軽く、長めに耳を吹く※

とっくに感じ始めて、スイッチが入っている主人公に、ダメ押しをするイメージで】

ふー……っ。

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ。

【少し間をあけて油断させてから。

※1回※ 耳を舐める。

ふいうちで、耳の入り口を、軽く舐める】

れるおっ……♡」

〈主人公〉

「んんうっ……♡」

● 左 0センチ

「そつと、優しく。

今の行動を言葉で補足する】

舐めたりしてしまつては……。

そのようなお声が出てしまうのも、仕方ないのかもしれないね」

〈主人公〉

「はあ……♡ はあ……♡ はあ……♡ つ♡

シーラのばかあつ……」

だが、紅潮した頬と期待に潤んだ目でこんな事を言ったところで、なんの意味もないだろう。

シーラは優しく、だが満足げに目を細め、すでに呼吸の荒い主人公を見下ろしている。当たり前すぎて時折忘れそうになるが、シーラは背が高い。

主人公とはずいぶん身長差がある。

一見細身だから気づかれにくいが力だって強いし、制服の下はしなやかで筋肉質だ。その気になれば、いつでも主人公を好きにできるのだ。

● 左 0センチ

「穏やかに優しく。」

『ばか』と言われても、まるで気に留めない様子で」

あら。お嫌でしたでしょうか。

では、もう仕舞いに致しましょう。

あまね様と日菜子様が、いつお戻りになるか、わかりませんものね」

シーラ、言いながら、主人公の脛にキスする。

主人公はそれを、またびくつと震えながら受け入れる。

●正面 0センチ 少しだけ上

「※1回※ まぶたにキスする。

一見『これでおしまい』と言っているようなキス。

しかし実際は、主人公をもっとその気にさせるためにキスしている」
ちゅ

シーラ、主人公から少し離れる。

〈主人公〉

「……………」
♡

それでもシーラは、腕力にものを言わせたり、一方的に物事を進めたりしない。

あくまで決定権は主人公にあると言わんばかりに、突然引いたり、そのくせ名残惜しそうにキスしてきたりする。

このような事をされては、主人公はもうダメだ。
もう我慢できなかった。

主人公はシーラを恨めしげに見上げると、観念して自分から顔を寄せる。

一刻も早くシーラとキスをして。その口の熱さや柔らかさを確かめたくなっていたのだ。

●正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

恨めしそうに見上げてくる主人公を、優しく見つめているイメージで
ん？」

SE 8 主人公がシーラに近づく音

【最初から最後まで流す】

主人公、シーラの制服の胸元を握って引き寄せ、自分からキスをする。

●正面 0センチ

「ほんの少しだけ驚いて。」

主人公がしびれを切らして自分から顔を近づけ、キスしてきたので
……あ……。

【※7回※ キスする。

受け身な甘いキス。主人公の好きにさせているので】
ん……っ。

ちゅ。ちゅ。ちゅっ……♡

ちゅ……ちゅ。ちゅっ♡

【ここから、自分も攻める。

舌を入れてデ IPP キスに移行する】

ああんむ……。

【※5回※ キスする。

軽く音を立てるデ IPP キス。

自分から積極的にキスする】

ちゅ。

ちゅっ。ちゅっ。ちゅばっ……。

んっ……♡

【※息づかいのみ※ で表現する。

満足げな吐息】

ふう……♡

【嬉しそうに微笑む。

主人公の顔を覗き込んで言っているイメージ】

ふふ。

【そっと優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで」
お嬢様ったら。

お口では『嫌』と仰りながら。

本当はこれをしたかったのですね？」

〈主人公〉

「……っ
♥」

●正面 0センチ

「『そつと優しく。』

答えは『イエス』だとわかっていて、わざとたずねる」

……もしかして、授業中から？」

〈主人公〉

「だめえ……っ？」

主人公、さっきまで張っていた意地などどこかに忘れ、いかにも甘えた声を漏らす。

人前では『学生兼経営者』だの『お家の立て直しに奔走するお嬢様』だのとして振る舞っているが、本質はこっちなのだ。

幼馴染のメイドの事が心底好きで振り回されて。

いつも、あらゆる意味で負けている。

彼女とのセックスがとにかく好きで、すぐ欲情して、すぐ行為をねだる。
主人公とは、そういう女性なのだ。

● 正面 0センチ

「【※4回※】キスする。

受け身な甘いキス。主人公の好きにさせているので」

んっ……。ふ。

ん……。ちゅっ♡

【※息づかいのみ※】で表現する。

満足げに息を吐く」

ふう……。♡

【そつと優しく。

まるで困っていない様子で。

セリフの内容に反して穏やかに」

ダメではございませんが……♡

『お嬢様はつくづく困った方でいらっしゃるな』とは、思います」

〈主人公〉

「……あ♡」

シーラ、主人公の左耳にささやく。

これによって、声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『ひそひそと、そつと、優しく。』

だけでも少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで」

お仕事が忙しかったとはいえ、授業中お眠りになるし。

起きたかと思えば……。

今の今まで。

このようにやらしい事で、頭を一杯にしていらっしゃる。

本当にいけない方ですね……♡

【一呼吸おいてから。

『ほんの少しためてから言う』感じで

そのようなお嬢様には」※

シーラ、主人公の左耳にささやいた後、そのままキスと耳舐めをする。

● 正面 0センチ

「【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス」

ちゅ。

【※1回※ 耳を舐める。

耳の入り口を、軽く舐めるだけ」

あんむ……。

【※しばらく※ 耳を舐める。

だんだん、少しずつ音を立てるようにして、ねっちりと舐める。

主人公を気持ちよくさせるのはもちろん、音から興奮を誘おうとしている耳舐め」

ああんむ……。れるおっ……。♡

れる、れる、れる。

れる、れる、れるっ ♡

ちゅっ ♡ ちゅっ ♡ ちゅばあっ ♡

はあんむ……ちゅっ。

ちゅばっ ♡

ちゅるるっ……れるれる……れるれる……れるれる……ちゅばっ ♡

ちゅっ ♡ ちゅっ ♡ ちゅっ ♡ ちゅばあっ…… ♡

ちゅ ♡

【※2回※ ゆっくり呼吸する。

満足げに、少し興奮した様子で】

ふ…… ♡

はあ…… ♡
「

シーラ、たっぷりとした耳舐めを終えると、再び左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【ひそひそと、そっと、優しく。

だけど少しセクシーな感じで。

主人公と聞き手に、今後のえっちな展開を期待させるような感じで。

トラック01での行動を再現するような感じで」

少々、おしおきをして差し上げなくては、ならぬかも知れませんね。 ※

【※1回※ 耳にキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡

〈主人公〉

「あ、ま、待って……♡」

しかし、主人公はこんなに淫乱で欲望に弱いくせに、肝心な所で臆病だ。
この期に及んで、続きを拒むふりをする。

● 左 0センチ

「『そつと優しく。』

主人公も既知の事を、再度自分の口から、優しく言い聞かせるように述べる」

大丈夫ですよ。お嬢様もすでに充分ご存知でしょう？

昼休みのこの講義室には、通りがかる方など殆（ほとん）どおられない。

購買に行かれた日菜子様は。

パンをお選びになる時、いつも大変迷われて……。
お戻りになるまで、しばらくかかる」

主人公、シーラの言葉を聞きながら思う。

——ああ、そんな事はわかってる。

わかっているからこそ、わたしはこうしているんだ。

『今なら大丈夫だ』って。『危なくなったら、シーラがすぐに気づくから』って知ってる
くらい。

わたしたちは隠れてこんな事をしてきたんだから……。

と。

〈主人公〉

「さっきと言ってる事違う……」

それでも主人公は食い下がってしまう。

それはシーラに負けるのが好きだからだ。

目一杯抵抗する振りをして、従順に好きにされるのが大好きだからだ。

● 左 0センチ

「『そつと優しく。』

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める。

主人公の意図をすべて理解した上で、しらばっくれて不思議そうにする」

あら。先程と仰る事が違うのは、お嬢様もではありませんか。

昼食をお召し上がりになると言っただかと思えば、『やはりやめる』と仰ったり。一体、如何（いかが）なさったのでしょうか」

〈主人公〉

「もおわかってるじゃんっ……」

さっきからあ♡ わかってて聞いてるでしょおっ♡」

● 左 0センチ

「『そつと優しく。』

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める。

主人公の意図をすべて理解した上で、わざと意図を尋ねる」
いいえ？ わかりません。

どうなさったのか、どうか私に教えていただけませんか？」

〈主人公〉

「っ……っ
♥
」

● 左 0センチ

「【少し考えて『ああ、わかった』という感じで。

そっと優しく】

ああ……わかりました」

だが、ここでシーラは推論を述べ始める。

主人公を念入りに負かすための『仕上げ』に入っただ。

● 左 0センチ

「【そっと優しく。

先ほどまでと全く変わらない口調で、主人公をいじめ始める】

お嬢様は、ずっと。

授業中、私（わたくし）に話しかけられた時からずっと。

【※全く変わらない口調のまま※】

甘えた感じのセリフを言う。

主人公の心情を予測して、それをあくまで淡々と述べる事で、主人公の羞恥心を煽っている。

『せつくしゅ』は『セックス』という意味。

『キスしながらクリイキ』で一つの単語として言う】

『せつくしゅしたい。シーラに学校で、後ろから抱っこでクリいじりされて。大好きな、キスしながらクリイキしたい』

【※全く変わらない口調のまま※】

元の口調に戻る】

と書いていらっしやったのですね？」

〈主人公〉

「あ。あっ………♥」

「そつと優しく。」

『全く煽っていない、優しい口調』で煽る。

答えは『イエス』だとわかっていて、わざとたずねる」

違う？

そのようでしたら、もう昼食に致しましょう。

お嬢様の時間は限られています。

このような事をしている場合ではございませんね」

こんな事を繰り返されて、主人公は、もう興奮のあまり泣き出しそうだ。認めてしまえば楽になれる。楽になった先には、とても気持ちいい事が待っている。そんな誘惑の前で、しり込みしているふりをする。

〈主人公〉

「ちが、わないうっ」

● 左 0センチ

「優しく続きを促す」

うん？」

でも、もう降参だ。

〈主人公〉

「違わないっ♡

シーラに色々されてっ♡ ……っ、濡れっ、ちやってる……っ♡」

主人公は、

……だって、シーラに犯されるのって最高なんだもん。

『これよりいい事なんて、この世にいくつあるんだろう』ってくらい、いいんだもん…
…！

なんて、心の中で誰に聞かせるでもない言い訳を述べながら、自分から行為をねだって
いく。

ここは学校なのに。

今日『も』、シーラとのセックスに耽る。

● 左 0センチ

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに同じトーンで煽る」
あら……。

そのような事になっておられたのですね。

それは申し訳ございません。

【※全く変わらない口調のまま※ 言う。

あたかもそれが、当然かつ、なんの問題もない事かのように言う。

『愛液で濡れたショーツを見せろ』という意味で言っている」

では、お嬢様。

今『濡れている』と仰られた箇所を、私（わたくし）に見せて頂けませんか？」

〈主人公〉

「ここでっ……？」

こうして、主人公はのまれていく。

してはいけない事だとわかっていながら、いけない方向へ、今日もまた流れていく。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。」

だが、きつぱりと有無を言わせない感じで」
ここで。

【穏やかに優しく。

丁寧に、これから主人公がどうするべきか指示する】

いつものように、私（わたくし）の足の間（あいだ）に来て。

今『濡れている』と仰った部分を見せたいのです。

スカートをたくし上げ、足を開いて。

いつものように。

【※少しわざとらしく、媚びた口調で※ 言う。

『嘘喘ぎ』のようなわざとらしさで。

主人公の心情を予測して、今度はさつきとは裏腹に、いかにも媚びた言い方をする事で
主人公の興奮を煽る。

『ちゅき』は『好き』。

『せつくしゅ』は『セックス』という意味】

『学校でおまんこいじられるのちゅき♥ 気持ちいい♥ せつくしゅちゅき♥』

【※さりと元の口調に戻って※ 話す】

と仰いながら。

恥ずかしいお姿を見せて欲しいのです」

〈主人公〉

「あ…………」

SE 9 主人公が椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE 10 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE 11 主人公が椅子に座り、シーラの足の間に腰かける音

【最初から最後まで流す】

主人公、とろけた目で息を吐くと、素直に立ち上がってシーラの膝の間まで向かう。そして、恨めしげにシーラを見上げながら、申し訳程度に逡巡したふりをして……。すんなり足を開き、下着を見せた。

〈主人公〉

「……………」
♥
」

こんなにあっさり従うのは、これがいつもしている事だからだ。
主人公は日常的にこのメイドに犯され、毎回似たような事をさせられているからだ。
シーラはこれを実感させるために、いつもこうさせるのだ。

● 左 0センチ

「『穏やかに優しく微笑む。
満足げに。』

素直に従う主人公が可愛いので」
ふふ。素直で可愛い」

これによって二人は『主人公がシーラに膝抱っこされている状態』になる。
シーラは主人公の左耳側に頭を置き、話しかけている。

シーラ、左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「『穏やかに優しく。』

少しだけゆっくり目に。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに同じトーンで煽る。

主人公の状況をわざと『じっくり実況』する事で、主人公の羞恥心と興奮を煽る」
全く。お嬢様は些細な事で、すぐ発情なされて。

自分から足を開いて。

このようにはしたなく欲しがって……。

本当に可愛い……♡ ※

【※3回※ 耳にキスする。

わざとちよつと音を立ててキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス」

ちゅ。

ちゅ。ちゅっ♡」

〈主人公〉

「あぁ……♡ お願い……♡ もう焦らさないでえ……♡

したいのっ♡ シーラとしたいっ♡
シーラに気持ちいいのされたいのおっ♡」

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひとときわ、特に優しく。

主人公を安心させるように。

内心激しく興奮しつつも、それはまだ見せずに話す」

ええ。承知しました。

ご安心下さい。

すぐ気持ち良くして差し上げますからね」※

しびれを切らして訴えると、シーラが嫌になる位優しくささやく。

シーラはいかにも清楚、性欲なんてなさそうに振る舞っているが、実態はその逆だ。

あるものをないように見せるのがうまいだけで、本性は主人公よりもよほどぎらついている。

今だって、主人公は今にも食べられそうだ。

彼女の欲望の贄になって、めちやくちやにされるのを待つばかりだ。

SE12 シーラが、主人公の下着の中に手を入れる音

【最初から最後まで流す】

SE13 主人公の濡れた股間の音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0―1秒ほどまで流した後、次以降の『シーラ』のセリフと重ねて流す】

▲1 で一度ストップする】

▲2 で再開する】

▲3 でSE14と切り替わる】

シーラ、あたかもそれが当然のように、主人公の下着の中に手を入れる。

そのまま……主人公のクリトリスに触れ、指先でゆっくりと愛撫を始めた。

● 左 0センチ

「【※息づかいのみ※】で表現する。

静かながらに、少し驚いている。

主人公の股間に触れ、濡れ具合を確認したところ、非常に濡れていたので」

ん……。

【※息づかいのみ※ で表現する。

長く、ゆっくりと息を吐く。

うっとりとしたため息をついている感じで。

主人公がたっぷりと濡れていて、とても嬉しいので】

ふー……♡
」

▲1 ここでSE14が一度ストップする。

●左 0センチ

「「これまででよりも少し興奮して。

まだ穏やかでありながらも、ここから少しずつ興奮してくる」

あら……こんなに濡れておられたのですか……♡
」

〈主人公〉

「……うるさいいっ……♡
」

主人公の下着の中を、シーラの指がゆっくりと、ゆっくりと上下に行き来する。

手のある部分が盛り上がり、布越しに動きを知らせてくる。

それは、わざとかと思うくらいゆっくり動く。

その度に主人公を、うつとりと痺れるほど気持ちよくして。主人公はその度『自分は今、こんな場所で足を広げ、こんな事をされているのだ』と思い知らされる。

▲ 2 ここでSE11が再開する。

● 左 0センチ

「※2回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸」

はあ、はあ……♡

「少し興奮気味に。

これまで通り上品でありつつも、少々素が出てしまっている感じで」
凄い。

このような音が出てしまうほど、欲情なさっていたのですね。

可愛らしい……♡

すぐに。すぐにイかせて差し上げますからね。

「※1回※ 耳にキスする。」

わざとちよつと音を立ててキスする。

耳の入り口に、軽く触れるだけのキス」

ちゅ♡」

〈主人公〉

「…………あ。あ、あっ…………♡」

シーラ、主人公の左耳側に唇を寄せながら、愛撫を続けていく。

その息が、興奮で少しずつ荒くなっていく。

主人公はそれを感じながら、目を閉じる。

足を小さくぴんと伸ばしたり内側に曲げたり、クリトリスで感じているものの特有の動きをする。

● 左 0センチ

「【※4回※】 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸」

はあ…………はあ…………はあ…………はあ…………♡

【※3回※】 呼吸する。

一つ前よりも少し早くなっている呼吸】
はあ、はあ、はあ。

【※3回※ 呼吸する。

一つ前よりも、意識してかなりゆっくり呼吸している荒い呼吸】
ふー……。ふー……。

ふー……。っ ♡

【※息づかいのみ※ で表現する。
うっとりとしたため息】

はあ……。♡
「

〈主人公〉

「……あ ♡ あ ♡

……っ シーラ、興奮しすぎ……。♡
「

● 左 0センチ

「【少し照れつつも、嬉しそうに。

にこやかに、すんなり素直に認める】

……はい。

お嬢様があまりにも可愛らしくて、昂（たかぶ）ってしまっています」

何とか放ったささやかな抵抗の言葉は、たやすく受け止められて溶ける。

主人公はもうおかしくなりそうなのに、シーラにはまだまだ余裕があるようだ。どんな指摘をしても、すんなりこれを認めてくる。

● 左 0センチ

「うつとりと嬉しそうに。

少し興奮して。

まだ、比較的穏やか。

自分が興奮している根拠を述べる」
だって。

まだ、軽くしか触れておりませんのに。

もう、こんなにも身悶えして……♡

こんなものを見せられては、平静でいられません」

〈主人公〉

「……っ♡

あ♡ あ♡ ……あ…っ♡」

愛撫が、少しずつ本格的になってくる。

比例して教室に響く水音もかすかに大きくなり、主人公の羞恥心を煽る。

主人公は身体ごと反らしたり、シーラの制服の袖を握ったり、不自然なほどゆっくり息を吸ったり吐いたりして、静かに快感に耐えている。

● 左 0センチ

「【※8回※】呼吸する。

だんだんゆっくりになる。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸。

主人公の喘ぎ声が、とにかく可愛らしいので」

はあ、はあ。

……はあ。

はー、はーっ。

はー……っ。

ふううつ、ふー……う。

【※1回※】呼吸する。

長めのゆっくりした荒い呼吸】

はー……♡

【少し興奮して。

まだ、比較的穏やか。

ここからまた状況を『実況』する事で、主人公の興奮と性感を煽っている】

お嬢様は、本当にクリいじりが好きですね……♡

私（わたくし）に抱かれながら、こうして」

シーラ、ここから時折、わざと指の動きと言葉を連動させて話す。
卑猥な音を、自らの口でも再現して見せる。

▲3 ここでS E 1 4がS E 1 5と切り替わる。

S E 1 5 主人公の濡れた股間の音2

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【▲4 でセリフとテンポを合わせて流す】

【▲5 で通常に戻る】

〔▲6 でセリフとテンポを合わせて流す〕

〔▲7 で通常に戻る〕

〔▲8 で速度が一段階早くなる〕

〔▲9 でセリフとテンポを合わせて流す〕

〔▲10 でフェードアウトする〕

※ここからトラック終了まで、シーラは、ずっと『やや興奮気味』になる。

『これまでと比較して、すべて一段階ほど興奮しているな』という感じになる。

▲4 セリフとテンポを合わせて流す。

●左 0センチ

「〔擬音部分を淡々と。〕

やや興奮しつつも、主人公の快感を優先して、抑えようとしている。

声と指の動きが連動しているイメージで」

ぬちよ、ぬちよ。ぬちよ。ぬちよ

と愛液をクリトリスに擦（こす）り付けて。

〔※少し感情がある程度の、淡々とした口調で※ 言う。
だんだん高くなる。〕

『棒読みっぽい喘ぎ』のようなわざとらしさで」

『あつ。あつ。あつ。あつ。あつ♥』

【※元の口調に戻って※ 話す】
と喘いで。

快楽を求めて腰まで揺らされて……♥

ここは学校なのに。お構いなしで、夢中になってしまわれるのですものね。
そんなにも、気持ち良くなりたいのですね……♥

【ぽそつと。

だが、本音が漏れている感じで」

可愛い」

〈主人公〉

「……！」

主人公が快感に小さく跳ねたのを見計らうかのように、シーラの攻めが強まる。
ねっとり、容赦なく、主人公の快感を高めてくる。

「穏やかに優しく。」

主人公が安心してイけるようにしたいので」
良いですよ。ほら」

▲ 6 セリフとテンポを合わせて流す。

● 左 0センチ

「【擬音部分を淡々と同じテンポで。

声と指の動きが連動しているイメージで」

ぬちよ、ぬちよ。ぬちよ、ぬちよ ♡

くちゆくちゆ、くちゆくちゆ。くちゆくちゆ、くちゆくちゆ ♡

クリトリスさんをさすって、気持ち良くなりましたよね…… ♡

【※ 6 回※ 呼吸する。

だんだん早くなる。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】

はあ、はあ、はあ。

はあ、はあ。

はあ……っ ♡

【※ 1 回※ 呼吸する。

長めのゆっくりとした荒い呼吸。

ここで呼吸を整えて、興奮しすぎないようにしている。

自分の興奮よりも、主人公を気持ちよくする事の方が大切なので」

ふーっ………♥

【※1回※ 呼吸する。

ここで呼吸を整える】

……はあ」

〈主人公〉

「……あ。あ♥ あ♥ あ♥」

シーラの指に全身を支配され、ただ喘ぐほかない主人公を、シーラが興奮した目で見つめている。

それを実感して、主人公はさらに感じてしまう。

ここが一体どこなのか、痛いほど理解した上で、ますます快楽の虜となる。

▲8 ここでS E 15の速度が一段階早くなる。

●左 0センチ

「穏やかに優しく。

少し興奮を抑えたので。

今度は『人に見つかるかも知れない事』をほのめかして、主人公を興奮させようとして
いる」

少々動きを早めましょうか。

このようなお姿を人に見られたでもしたら、大変ですものね。
誰かに見つかる前に、ご満足頂かなくては……♡」

そんな主人公に、シーラがささやく。

たっぷり優しくして、丁寧に扱いながら、的確に主人公をめちやくちやにしてい

シーラ、主人公の左耳にささやく。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて同じトーンで煽る。

主人公の性癖をあえて言葉にする事で、主人公の羞恥心と興奮を煽る」

お嬢様はこうして、毎日。

毎日メイドにイカされないと生きていけない。

見つきりそうな場所であるのが大好きな。

露出癖（へき）のある方である事が、バレてしまいますもの……♡※

シーラ、言いながら指の動きを早めていく。

主人公の絶頂が近づいている事、そろそろ友人たちが戻ってくる事を考慮し、主人公の『特に弱いところ』を攻め始める。

主人公はもう、ただされるがままなくせに不相応なほど感じて、指が一回往復する度に甘いため息を漏らすばかりだ。

●左 0センチ

「※8回※ 呼吸する。

だんだん早くなる。

興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸」

はー。はー。はー。はあ。

はー、はあ。はーっ、はー……♡

〈主人公〉

「っ……く ♡ あ ♡ あ ♡ あっ ♡

いいっ…… ♡ シーラ、きもちいいよお…… ♡

これ好きいっ…… ♡」

● 左 0センチ

「『穏やかに優しく。』

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて話す。

主人公の特に感じる部分（『ここ』）を愛撫しながら」

ああ……ここですね。

お嬢様の大好きな、ここ。

ここを、側面から優しくさすって……中心に向かって、斜めに動かして。
この速さで」

▲ 9 セリフとテンポを合わせて流す。

● 左 0センチ

「『擬音部分を淡々と、同じテンポで。』

声と指の動きが連動しているイメージで」

すりすり。すりすり。すりすり。

すりすり

とするのが、好きですものね。

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】

はあ……はあ……はあ……はあ……」

〈主人公〉

「シーラっ……キスして……」

ちゅー……♡　ちゅーして♡」

主人公が涙ながらに訴えると、シーラが微笑んだ。

すでに絶頂が近づいている事、その時ばかりは声を抑えられそうもない事を、シーラは理解している。

シーラはそのまま主人公の顔を引き寄せると、唇にキスをする。

たっぷりと口づけ、その中まで丁寧に犯していく。

これによって声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 0センチ

「【※1回※】キスする。

シーラからキスする、キスが始まる動作。

主人公の顔をこちらに向けさせてキスしている」
ん……。

【※しばらく※】キスする。

たっぷり積極的に、ねっとりディープキスする。

喘ぎ声が漏れそうな主人公の唇を塞ぐ事で、嗜虐心が満たされるキス】

ちゅ。んっ……ちゅっ♡

ちゅっ。ちゅっ♡

……ちゅばあっ♡

れろれろ。れろれろ。れろれろ。

ちゅるるっ……♡

はあんむ……ふちゅっ♡

ちゅるっ、ちゅ♡♡ ちゅ♡♡

【※1回※】呼吸する。

ここで唇を離す】

んっふ……。

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸】
はあ……はあ……はあ……はあ……。

【うつとりと声を漏らす。

穏やかでありつつも、素の本音が漏れている感じで】
ああ……。

お嬢様、可愛い……♡

大好きです。私（わたくし）の可愛いお嬢様……♡

【※1回※ キスする。

シーラからキスする、再びキスが始まる動作】
ん……。

【※5回※ キスする。

たっぷり積極的に、ねっとり&Dampキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス】

ああんむ……ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡

【※3回※ 呼吸する。

少し興奮気味の、少しだけ荒く、少しだけ早い呼吸」
はあ……はあ……はあ……♡

〈主人公〉

「シーラっ……♡ シーラあ……♡」

● 正面 0センチ

「『穏やかに優しく。』

内心激しく興奮しつつも、それを抑えて話す。

余裕のあるふりをしている」

あら……もうイきそうですか？

学校でする時は、いつも本当にすぐイッてしまわれますね。

いつも外でのセックスでは、沢山感じて仕舞われますものね……♡」

主人公、涙に濡れたとろけた目でシーラを見上げ、絶頂がすぐそばに迫っている事を知らせる。

シーラはそれを見て、ダメ押しのようにささやく。

これによって声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「【穏やかに優しく。

少しだけ早口になる】

ええ、どうぞ。どうぞ絶頂して下さいませ。

このように……」※

これによって声の方向が『左』から『正面』に変わる。

●正面 0センチ

「【※1回※ キスする。

主人公の唇を塞ぐ】

ん。

【少し苦しそうに。

キスの合間に、何とか話す感じで】

唇を塞いでおいて。

【※1回※ キスする。

再び主人公の唇を塞ぐ」
ん。

【少し苦しそうに。

キスの合間に、何とか話す感じで

差し上げますから……♡」

〈主人公〉

「んんうっ……♡ んーっ……♡ んー……♡」

●正面 0センチ

「【※6回※ キスする。

たっぷり積極的に、ねっとりどデープキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス」

んれろおっ……♡ んっく……♡

んうっ……♡ ん。 んっ♡

【※3回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーっ、ふーっ。

ふううつ……♡

【※しばらく※ キスする。

だんだん苦しそうなキスになる。

たっぷり積極的に、ねっとりデープキスする。

主人公が好きでたまらないという感じのキス】

ん♡

んんつく……ん♡ ん♡ ん♡ ん♡

んーっ……♡ ん♡

【※6回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーはあ、ふーはあ。

ふーはあっ……♡

【※しばらく※ キスする。

ひとつ前よりも、さらにもう一段階苦しそうなキスになる。

だんだんさらに苦しうになっっていく。

主人公の絶頂が近づいてきている】

ん。んっ……♡ んーっ、ん♡ んう……♡

んっ。ん……ん……♡ んんう……っ♡

んーっ ♥ んーっ ♥ んーっ …… ♥

【※1回※ キスする。

ここで、主人公が絶頂する。

※絶頂ポイントである事を、比較的わかりやすく伝えて下さい※
んんううっ …… ♥」

▲10 ここでSE15がフェードアウトする。

●正面 0センチ

「【※12回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

興奮気味の、荒く、早い呼吸】

ふーはあ、ふーはあ。ふーはあ。

ふーはあ、ふーはあ。ふーはあっ ♥

【※6回※ ※鼻で※ キスしたまま呼吸する。

だんだんゆっくりになる。

苦しそうな呼吸】

ふーはあ、ふーはあ、ふーはあっ ……。

【※1回※ 呼吸する。

ここで唇を離す」

はあ。

【※9回※ 呼吸する。

だんだんゆっくりになる。

とても荒く、早い呼吸が、だんだんゆっくりになって、落ち着いていく】

はあ、はあ。

はあ。はあ。はあ。

はーっ…… はーっ…… はーっ…… 」

〈主人公〉

「はーっ…… はーっ…… はー……っ はー……っ 」

こうして、主人公は絶頂した。

学校の昼休み。大多数の生徒が食事をしたり、休憩を取ったり、ごく健全な遊びをしたりしている中、隠れて、自ら望んで、恋人に犯されて絶頂した。

SE16 シーラが身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

● 正面 0センチ

「※1回※ キスする。

わざとわかりやすく音を立ててキスする」

ちゅ♡

「※息づかいのみ※ で表現する。

満足げに息をつく」

……ふう。

「優しく主人公を褒める。

満足げに。

『とても可愛らしく、魅力的に絶頂しましたね』という意味で言っている」
ふふ。よくできました。

「※4回※ キスする。

優しい、軽いキス。

イツて疲れている主人公を、いたわるようなキス」

んっ……。ちゅっ。ちゅっ。ちゅ♡

「優しく主人公を褒める。

満足げに。

『とても可愛らしく、魅力的に絶頂しましたね』という意味で言っている」ともお上手でしたよ……お嬢様。

【※1回※ キスする。

優しい、軽いキス】

ちゅ♡

〈主人公〉

「……♡

着……なきや。そろそろ日菜子たち戻ってくる……」

SE17 主人公が身体を動かす音

【最初から最後まで流す】

主人公、シーラにたっぷり甘やかされて内心とろけ切っているくせに、無理に体を起こし、シーラから離れて下着を穿こうとする。

だが、うまく行かない。あまりにも気持ちよすぎて、達して身体が弛緩するとともに、けだるい疲労感が襲ってきたのだ。

おそらくこのまま何もなくても、シーラが穿かせてくれるだろう。

だが、やはり自分の事は自分でしたい。
だから、今すぐ自力で、と思うのだが……身体が上手く動かせないのだ。

● 正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

すでに、まるでセックスなんてしなかったかのように通常通りの態度で」
ええ……お召し物を直しましょう。

「しれっと。」

まるでそれが当然かのように言う」

ああ……でも、こちらはお預かり致しますね」

〈主人公〉

「あっ……!!」

SE18 シーラが主人公の下着を完全に脱がす音
「最初から最後まで流す」

すると、シーラが予想だにしない事を言い出した。

シーラはさらりと主人公の左足を持ち上げると、足首にかかっていたショーツをそのままおろす。

そのままその手中に収めると、当然のように奪い取って荷物の中に入れてしまったのだ。同時に、イッたばかりの主人公の性器に小さく風が通る。

それはひんやりしていて、それなのに主人公は、また熱くなってしまった。

シーラ、主人公の左耳にささやく。

これによって声の方向が『正面』から『左』に変わる。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「穏やかに優しく。」

あたかも、それが当然であるかのように言う」

このような汚れた下着を身につけていては、気持ち悪いでしょう？
ですから。お嬢様はこのまま。

下を穿かずに。放課後までお過ごし下さい。

……ね？」※

〈主人公〉

「何、言っ……♡」

だが、主人公の抗議の言葉はまたも意味をなさない。

シーラが予想した通りのタイミングで……あまねと日菜子が戻ってきたからだ。

▲ ボイス加工あり

【とても遠くで、かすかに聞こえる】

『ほんのかすかに聞こえる』『何を言っているのか、完璧には把握しづらい』程度の音量でお願いします」

〈あまね〉

「日菜子に話しかけている。

楽しそうに。

なんでもない雑談。

好きな購買のパンと、お昼ご飯で食べ大量について話している」

ん……。あまねとしてはあ。

ツナのサンドウィッチが一番好きなんだけとお。

サンドウィッチだけだと足りない時があつてえ……。

そういう時にあんぱんがあると。助かるっていうか……」

▲ ボイス加工あり

「とても遠くで、かすかに聞こえる」

「『ほんのかすかに聞こえる』『何を言っているのか、完璧には把握しづらい』程度の音量でお願いします」

〈日菜子〉

「『あまねに話しかけている。

楽しそうに。

なんでもない雑談。

好きな購買のパンと、お昼ご飯で食べ大量について話している」

あまねはほんと甘いパン好きだよね」

〈主人公〉

「……………あ……………っ♡」

● 正面 0センチ

「『穏やかに優しく。

まるで何事もなかったかのように、自分たちは普通に過ごしていたかのような口調で言う。

次のセリフとの対比を作る」

さあ。もうお二人が来ますよ」

恥ずかしさと心許なさで全身を熱くする主人公に、シーラが優しく告げる。

それはあまりにも優しく、また、慣れていて……。

主人公は、いつもこのメイドに負けっぱなしである事を、実感してしまうのだった。

★左 ささやき 0センチ ※マークのセリフまでささやく

「ひそひそと、そつと、優しく。」

だが少しセクシーに、意地悪な事を言う」

ちゃんと上手に……誤魔化して下さいね」※

ここでフェードアウトして終了。